

学校教育審議会中間まとめ（案）

令和2年1月29日

< 児童生徒を取り巻く社会と教育の変化 >

- 厳しい挑戦の時代を乗り越え、高い志や意欲を持って、他者と協働しながら未来を創り出していく資質・能力が求められている。
- 小諸市の生産年齢人口も今後急速に減少していく。どの子どもも近い将来を担う大切な人材である。
- 学校教育の変革が始まっている。
資質・能力（学力）の捉え、大学入試改革、高校入試改革
希望や志、求められる資質・能力（学力）の育成、高校選択の力を育むこと。

< これからの時代を生きる児童生徒が育つ「より望ましい学校の姿」 >

児童生徒にとって「私がよりよく成長し、未来への希望や志をもつことができる」学校であることが何よりも望ましい学校である。
その学校、その学年、その学級の児童生徒「一人一人」の資質・能力（学力）の育ちに目を向け、「一人一人」の学びを支える教育への転換を教育関係者のみならず市民の力も得て進めること。

児童生徒「一人一人」の学びを支える教育への転換を図る学校

< 児童生徒一人一人の学びを支えるものは >

児童生徒を支えるのは学校職員、保護者、地域（市民）であることはもちろんであるが、求められる資質・能力（学力）は、大人が知識や技能を教え励ますだけで身に付けさせることは難しい。子どもの心の育ち（非認知能力）、言語の育ち（言語能力）が子ども自身の学びを支え、資質・能力（学力）を伸ばす。

○心の育ちが学びを支える

児童生徒一人一人に自信、意欲、協調する力、粘り強さ等の非認知能力と呼ばれる心の育ちに支えられた学びを実現すること。

○言語の育ちが学びを支える

言葉が豊かになれば、考える力も理解する力も向上しない。人と心をつなげる力も向上しない。言語能力の向上に支えられた学びを実現すること。

< 「より望ましい学校の姿」の実現を図る学校運営の在り方 >

学びを支える力は年令を重ねれば自ずと育まれていくものではない。
意図的、継続的、計画的な取り組みが必要となる。

- 小中9年間を通して連続的・系統的に実践する一貫性のあるカリキュラムをつくり、同じ方向性をもって全職員で指導に当たること。
- 「今どのように、どの程度に資質・能力が育ちつつあるか」を評価し、その成果と課題を小学校・中学校で共有し、互いに取り組みを改善し、先を見据えて計画的に推進していく一貫性のあるカリキュラム・マネジメントを推進できること。

学校教職員と行政サービスの集約

学校職員数を確保し、学年や教科がチームをつくり、協働して「一人一人」の学びを支えること。

市民参加による教育の推進

児童生徒を支える活動への地域市民参加と信州型コミュニティ・スクールの組織を充実させていくこと。

ICT機器の活用

主体的・対話的で深い学びを実現することや、自分の進歩の状況や課題に合わせて学習を進めることができるよう機器の充実と活用を推進すること。

< 学びを支える環境を整える >

- 保護者を支える相談体制、支援体制づくり
- 「合理的配慮」「ユニバーサルデザイン」に基づく学習と学校の環境整備

< 連携・一貫性のある教育の具体的な体制づくり >

9年間を通して連続的・系統的に教育を進めるカリキュラムをつくるとともに、小学校・中学校間で一貫した計画性のあるカリキュラム・マネジメントを推進するためには、芦原中学校と小諸東中学校を学区とする併設型小学校・中学校の形態で小中一貫教育を推進することが望ましい。